

地域研究コンソーシアム賞

地域研究コンソーシアム (JCAS) は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて(1)共同研究の企画・実施・支援、(2)海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、(3)研究成果の国内外への発信・出版、(4)地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績ならびに社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。

第9回(2019年度)地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第9回(2019年度)地域研究コンソーシアム賞(JCAS賞)の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について下記の通り、審議結果を発表します。

地域研究コンソーシアム賞の研究作品賞は、地域や国境、そして学問領域などの既存の枠を越える研究成果を対象とするもので、作品の完成度を評価基準としています。登竜賞も研究作品賞と同様の趣旨ですが、研究経歴の比較的短い方を対象としていますので、作品の完成度に加えて斬新な指向性や豊かなアイデアを重視して評価しました。社会連携賞は、狭義の学術研究の枠を越えた社会との連携活動実績を対象としています。

審査については、運営委員会が担う一次審査によって審査対象作品および活動を絞り込み、専門委員から、一次審査で絞り込んだ作品あるいは活動に対する評価を書面で回答していただきました。今年度の専門委員は、研究作品賞については五月女律子氏、染田秀藤氏、床呂郁哉氏、登竜賞については石川登氏、湖中真哉氏、桃木至朗氏、そして社会連携賞については家田修氏、立岩礼子氏、宮原暁氏にお願いしました。そして、一次審査の結果および専門委員の評価を踏まえて、地域研究コンソーシアム賞審査委員会(理事会)において最終審査をしました。この場を借りて、審査に関わってくださったみなさま、とりわけ専門委員諸氏に感謝申し上げます。

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品12件、登竜賞候補作品20件、社会連携賞候補活動2件の推薦があり、一次審査によって絞り込まれ専門委員による評価の対象となっ

た作品および活動は、研究作品賞3件、登竜賞3件、社会連携賞2件でした。社会連携賞については、最終的に該当する活動がないという判断に至りました。それぞれ意義ある活動の推薦がありましたが、社会連携の内容が十分に明確ではない、時期尚早である、等という判断により該当なしとなりました。また、審議の結果、研究作品賞には登竜賞に推薦された作品が受賞作として選ばれました。審査のいずれの段階においても文句なしに高い評価を得た点で、抜きんできていたということからこのような決定となりました。

多くのすぐれた作品・活動の推挙を感謝申し上げますとともに、受賞された皆様には、心からのお祝いを申し上げます。

以下は、各章の受賞理由ならびに受賞作品・活動に対する講評です。

研究
作品賞

Hideaki Suzuki.

***Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean:
Suppression and Resistance
in the Nineteenth Century.***

(Palgrave Macmillan, 2017.)

※登竜賞部門に推薦された作品ですが、研究作品賞にふさわしいため研究作品賞を授賞することになりました。

本書は、19世紀インド洋西海域における奴隷交易者の実態を解明し、奴隷交易とその廃絶活動との相克がインド洋西海域世界に与えた影響を論じた歴史学的研究である。実態解明が遅れてきたこの海域の奴隷交易について、イギリス、フランス、アメリカ、インド、ザンジバルなどの文書館や図書館で蒐集した断片的で膨大な史料を駆使し、その動態を詳細かつ多面的に描き出した力作である。

この海域において奴隷交易とその他の交易とは不可分であったことから、奴隷交易廃絶活動は、インド洋西海域世界という歴史世界そのものの存続を大きく左右する活動であった。その観点から、本書では特にイギリスが奴隷貿易を禁じた19世紀半ば以降、同海域において奴隷貿易がどのような影響を受けたかについて、インド、アラブ、イギリス、フランス、アメリカなどの商人や奴隷など様々なアクターのインタラクションを学際的手法により地域の社会史を映し出しながらミクロに分析している。そのうえでグローバルな変動に対応するインド洋西海域世界の持続・変容というマクロな現象を捉え、特定地域の実証研究をグローバル・ヒストリーが射程とする視座まで引き上げている。

従来の研究では、世界経済や植民地化の拡がりによるインド洋海域世界の崩壊が主張されてきたのに対して、著者は、むしろ変容を伴いながらも継続してきたという観点から、廃絶活動への奴隷交易者の対処を具体的に分析し、新たな環境を「飼い慣らす」彼らの主体性を描出し、それがインド洋西海域世界の商業ネットワークをより活性化させる一方、この海域世界に現地の、そして植民地支配の政治権力の積極的な介入を招き入れていたその相互的なダイナミズムの実態を明らかにしている。大西洋奴隷貿易とは違ったアクターと商品の多様性を特徴とする在来ネットワークが、イギリスによる奴隷貿易禁止政策など

英仏米勢力が創り出す新しい条件の下でこそ展開のピークを迎えたという主張は、植民地支配や帝国主義を見直す多くの論点につながる。

インド洋西海域に限らず、これまでの海域史研究は、世界経済が伸長し植民地化が進展していく18世紀半ば以降、すなわち近代には立ち入らない傾向にあった。近代の世界的な動きにより海域世界が崩壊したと断定し、考察対象として近代以降の海域世界を放棄してきたのである。しかしそれは西洋世界を中心とした歴史観であり、本書は、19世紀における奴隷交易者とその廃絶活動の相克に関する具体的な事例研究をもとに、インド洋西海域世界の持続と変容のダイナミクスを描き、海域史研究における諸前提や認識論上の問題を再考し、西洋中心史観に切り込んでいる。

ミクロな分析をもとにグローバルな変動に対応するインド洋西海域世界の持続・変容というマクロな現象の解明に成功している本作品は、地域史・海域史研究の新たな可能性を示す国際的かつ先端的な歴史研究となっており、またこれを若い日本人研究者が英語で発信したことを高く評価する。地域研究の進むべき一つの方向性を示した取組としてきわめて有意義であり、地域研究コンソーシアム研究作品賞に値する。

●受賞者プロフィール

鈴木 英明（すずき ひであき）



国立民族学博物館グローバル現象研究部助教。博士（文学）。学習院大学文学部史学科卒、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程、東京大学大学院人文社会系研究科修了。日本学術振興会海外特別研究員などを経て、2014年長崎大学多文化社会学部准教授、2018年8月より現職。インド洋西海域世界を足がかりに、既存の歴史学の枠組みではこぼれ落ちてしまってきた事物、現象を拾い上げ、地球規模の歴史像の構築を目指している。

登竜賞

中山大将 著

『サハリン残留日本人と戦後日本
——樺太住民の境界地域史』

（国際書院、2019年）

本書は、サハリン残留日本人の「通史」を描いた境界地域史として秀逸な力作である。新しい地域研究の方法論として提起された「境界研究」の枠組を援用し、大日本帝国期の「日本」から移住し第二次世界大戦後のサハリン＝樺太に「残留」し、またはそこから色々な時期に「帰国」した人々について文献調査とインタビューを組み合わせ研究したもので、大日本帝国の歴史と記憶、国籍と民族、ジェンダーなどについて、多くの興味深い事実を明らかにした好著である。

本書は、堅実な歴史研究であると同時に、一国研究や閉じた地域研究に回収されない「境界地域」という概念を援用し、境界変動によって生まれた残留集団を分析する。そのため

に歴史学内部の議論や理論だけではなく、移民研究、多文化主義研究、境界研究といった地域研究関連諸分野の理論や研究蓄積を広く参照し、その統合的発展を学際的に目指している。それにより著者は、日本植民地研究という研究枠組自体に批判的検討を加えて地域横断的、時間縦断的な「境界地域史」という分野・領域を超えた学術的アプローチを提案する。従来、マスコミでも研究でも「戦争」、とりわけ第二次世界大戦と強く結び付けて理解されて来た「残留」現象を、「境界変動」に伴う現象として位置づけ、近現代におけるその普遍性を提起している。

本書において著者は、従来は個別の文脈で研究・報道がなされて来た、サハリン残留日本人、サハリン残留朝鮮人、日本人樺太引揚者という三つの集団について、ひとつの集団を突出させることなく、各集団について10年近くにわたり日韓口各国で地道な聞き取り調査や資料調査を行なうことで、着実な比較研究を実現している。そのために、日本語圏はもちろんのこと、ロシア語圏、韓国語圏、英語圏、中国語圏の先行研究や文書館資料など膨大な資料を渉猟している。多言語史料と学際的先行研究を広範に活用し、埋もれた境界史を精緻かつ多面的に照射し得ている。随所に地域住民目線に立った興味深い発見が溢れており、学際的示唆を与え得る資料的貢献が成され、後世に継承される資料的価値も有している。個々の資料の分析も、地域の脈絡を繊細に踏まえて良く練られている。

内外の批判を気にするあまり、学問分野、対象集団、対象時期、そして対象地域を限定し、関連研究コミュニティの中で完結してしまいがちな若手地域研究者の陥穽を乗り越えて理論・実証両面から果敢な挑戦をしている。以上の点から本書は、地域研究の見本になる著作であり、地域研究コンソーシアム登竜賞に値すると評価できる。

最終審査に至る過程で、コミュニティやネットワークを欠く残留者に関するケース・スタディが、著者の提起する境界地域概念と十全に接合し、分析されているか疑問が残ること、また、やや論点が拡散してしまった感があることも指摘されたが、境界変動という理論的大枠は構成において一貫しており、賞に値するという評価は揺るがなかった。

●受賞者プロフィール

中山 大将 (なかやま たいしょう)



釧路公立大学経済学部専任講師、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究共同研究員、国際日本文化研究センター共同研究員、京都大学博士（農学）。2010年3月に京都大学大学院農学研究科博士課程修了、その後、京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員、日本学術振興会特別研究員 PD（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター所属）、京都大学地域研究統合情報センター（現・東南アジア地域研究研究所）助教を経て現職。

2019年9月27日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会